HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「殺狗勧夫」物語の研究 : 中国戯曲における犬文化から [全文の要約]
Author(s)	呉, 秀娟
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15068号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85476
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Xiujuan_Wu_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：呉　秀娟

学位論文題名
「殺狗勧夫」物語の研究――中国戯曲における犬文化から

本論文では、おもに同じストーリーを持つ、宋元時代の雑劇『殺狗勧夫』と南戯『殺狗記』（以下、あわせて「「殺狗勧夫」物語」と称する）の両劇の主要なプロットである「犬を殺す」というくだりに注目し、犬のイメージの淵源や犬が作中に登場することの効果について論じた。

第一章では、「殺狗勧夫」物語の版本および先行研究について整理した。「殺狗勧夫」物語に含まれる両劇の版本については、南戯『殺狗記』の初期の脚本は後世まで伝わっておらず、唯一の完本としての脚本は、明代末期刊行のものである。これに対して、雑劇『殺狗勧夫』の元代当初の脚本が後世まで伝わっていることを述べた。

先行研究については、雑劇『殺狗勧夫』に関する先行研究は比較的に少ないため、南戯『殺狗記』を中心に紹介した。「殺狗勧夫」物語に関する研究は、おもに四つの方面から行なわれている。すなわち、①雑劇『殺狗勧夫』と比較し、南戯『殺狗記』の新しく増えた関目の長短を述べたもの、②「殺狗勧夫」物語を儒教道徳の観点から論じたもの、③南戯『殺狗記』の欠点を指摘したもの、④南戯『殺狗記』の版本に関するもの、である。それに対して、「殺狗勧夫」物語における犬を殺すくだりに注目した論文は非常に少なく、管見の限り王政の「『殺狗記』古俗考」しかない。

第二章では、成立年代や作者などについていまだに定論がない南戯『殺狗記』の作者、成立時期、そして評価について、これまでどのように語られてきたのかを整理した。

南戯『殺狗記』の作者については、不明だとする見解を除けば、元末明初の徐畑が原作者と改編者のどちらであるのかが争点となっている。また徐畑の作と偽称したとする説も見られる。四つの説の中で、どの説がより説得力を持つのか、これを論ずるためには、南戯『殺狗記』の書かれた時期についてもあわせて考察する必要があるだろう。

しかし、南戯『殺狗記』の成立時期もまた、様々な説がある。明清以降、おもに雑劇『殺狗勧夫』とどちらが先行するのかについて議論がおこなわれてきたが、この点についても、いまだ決着はついていない。また、そのこととも関連して、作品に対する評価も大きく割れている。

このように、明確な情報が少ない南戯『殺狗記』について、現段階でわかっていることは、南戯『殺狗記』の改編が元末明初に始まったことと、それ以来、数多くの改編本が世に出たことである。その改編本の多さは、明清時代における南戯『殺狗記』の評価が大きく割れている一因だと考えられる。

第三章では、おもに南戯『殺狗記』について、人と犬との関係に注目し、雑劇『殺狗勧夫』と場面を比較しながら論じた。

まず、王婆とその飼い犬の関係について、王婆の、なかなか犬を売らない態度や、犬を殺す時の台詞などに注目すると、観客を笑わせようとする丑役の工夫が感じられる一方で、王婆にとって犬

は番犬であり、夫の死後は家族のような存在であったことも見てとれる。

古代中国では、犬はほかの家畜と同様におもに食用とされてきたが、人間の暮らしにおける家畜の貢献度が高いほど食用にされることが少なかった。そのことを踏まえると、南戯『殺狗記』における王婆の犬は、王婆への貢献度が非常に高く、そのことが王婆の犬への態度とも大きく関わっているものと考えられる。

王婆と犬について、別の角度から指摘するならば、南北朝時代以降、犬食の習慣が徐々に廃れてゆき、犬を番犬として使うべきであるとの主張が強まったこともまた、両者の関係の背景として挙げられるだろう。

また、宿屋の王婆が明清小説における「馬泊六」式人物のように、金に執着し残酷無比な性格であることを指摘し、王婆にとっては、「人が犬に及ばない」であることを述べた。

その王婆と対照をなすのが楊氏と迎春である。犬を買って薬の材料にしようとすることからは、ふたりにとっては「犬が人に及ばない」ということがわかる。

以上のように犬に対する相反する態度が作中に両立することの背景として、犬の持つ「忠実」と「凶悪」という二面性があることを指摘した。

第四章では、「殺狗勧夫」物語において犬が選ばれた理由について、その先行する話柄との関連を中心に考察を行なった。

まず、「殺狗勧夫」物語が『漢書』「五行志」の昌邑王劉賀が犬の服妖を目撃した話と類似の構造を持つことを示し、「殺狗勧夫」物語の一部が、そこから趣向を模したものである可能性を指摘した。

また、「殺狗勧夫」物語以前にも、犬が人間の衣冠を身につける話や人間が犬にそれらを着せるといった「犬服妖物語」があることを指摘し、「殺狗勧夫」物語の犬を殺すくだりについて、犬を服妖に仕立てて災いを未然に防ぐことを狙ったものだとする解釈を示した。

最後に、「殺狗勧夫」物語に見られる犬に関する典故を取り上げ、作り手が古来の犬物語に精通していたことを明らかにし、さらに先行文献に取材した可能性について検討した。

第五章では、「殺狗勧夫」物語に登場する犬が展開において不可欠であることを踏まえて、それが舞台上でどのように演じられたのかを考える基礎作業として、戯曲において動物を演じる方法の整理を試みた。

まず、動物の役柄の表現方法である、人間による動物の上演と本物の動物を使った上演が、いずれも百戯雑技に端を発することを述べた。

続いて、戯曲の舞台上で動物を演じた可能性を検討した。その際、本物の動物を登場させることが、パフォーマンスにおいてはよく見られるものであったが、戯曲においてはまれであったということを述べた。そのほか、人間が動物を演じる場合の方法についても取り上げた。

第六章では、ここまでの、「殺狗勧夫」物語に見える犬のイメージの淵源をたどる作業との関わりから、中国古代の祭祀において犬が用いられる事例を取り上げ、物語が成立する以前における犬のイメージについて論じた。

まず、犬が用いられた祭祀についての記述を整理し、犬の色に言及が見られるものとそうでない

ものがあることを指摘し、両者の特徴を述べた。

続いて、犬が祭祀に用いられた理由として、陰陽五行説でいうところの陽畜または金畜だとみなされるためだとする説について、それぞれに批判的な検討を加えた。

さらに、犬が祭祀に用いられる背景として、「守備する」という犬本来の性質が挙げられていることについても論じた。

最後に、祭祀に白犬が多く用いられる原因を検討し、トーテムとしての白犬や天狗などの不思議な力を持つ犬が白色であることと関係があることを示した。

各章の総括は以上である。本論文では、「殺狗勧夫」物語において犬が用いられていることへの疑問から話を始め、作中における犬の役割や、その背景にある犬のイメージについて論じた。そして、書き手が意識的であったかどうかは判断しがたいものの、先行する犬に関する記述が作品の形成に少なからず関わっていることを明らかにした。